

## コロナ禍での保育実習（学内実習）の実践報告 —障害者の生活支援を取り入れた取り組み—

### A Report on In-School Childcare Internship under Coronavirus Pandemic Situation —Focusing on Life Support for Physically Challenged People—

松 居 紀 久 子  
MATSUI Kikuko

#### 【要約】

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、本学幼児教育学科では「保育実習Ⅲ」（施設実習）を学内実習、学外実習それぞれ 5 日間の 2 部構成で実施した。本研究の目的は、学内実習の生活支援の部分に焦点を当て、実習内容の成果と今後の課題を明らかにすることである。

実習先へのアンケート調査及び、学生の実習日誌・学内実習と学外実習の事後レポートから、1. 実習先は、学生が障害児・者に対する生活支援技術を学んでいることを望む傾向があること。2. 学内実習に介護実習室、福祉用具等の組み入れが有意義であったこと。3. 保育士を目指す学生が介護分野の生活支援技術を学ぶことで、多職種協働への理解につなげることができたことが明らかになった。今後の実習でも、実習の事前学習の内容について検討の継続が必要であることが示唆された。

**キーワード** 保育実習 施設実習 学内実習 生活支援技術

#### I 目的

保育士養成課程の保育実習実施基準に基づいて、本学幼児教育学科では「保育実習Ⅲ」（施設実習）は従来 2 年前期の 6 月に学外実習として 10 日間実施してきた。しかし、新型コロナウイルスの流行拡大防止のため、時期を変更して学内実習 5 日間（6 月授業期間）と学外実習 5 日間（8 月夏季休暇期間）に分けて実施することとした。また、学内実習の 5 日間は生活支援と模擬保育についての構成とした。

生活支援については、「保育実習Ⅲ」の前にまとめた「保育実習Ⅰ-2」（施設実習）の学内事前指導に関する施設側の要望と、T 県内では障害児の施設実習先が少なく、障害者施設での実習が余儀なくされる状況から、介護教員資格を有する筆者が介護職員初任者研修や介護福祉士養成課程での教授内容などを参考に内容を検討し、実施した。

本研究では、今後の保育実習（施設）の事前指導にも役立てるべく、学内実習の日誌及び

学内実習レポートに見られる生活支援の学習についての成果と今後の課題を明らかにすることを目的とする。

## Ⅱ 方法

### 1. 実習レポートの分析・考察

#### (1) 対象学生

保育実習Ⅲを選択 2 年生 11 名 (12.4%) ※在籍学生 89 名

#### (2) 実習の事後レポート

##### ①学内実習 5 日間の終了後に提出

(A4 1 枚、20 行 手書き 約 800 字)

##### ②学外実習の事後レポート

学内実習 5 日間の終了後に提出

(A4 1 枚、20 行 手書き 約 800 字)

## Ⅲ 保育実習Ⅲの構成

### (1) 保育実習Ⅲの概要

- ・実施期間：①学内実習 6 月 22 日 (月) ～ 6 月 26 日 (金) 5 日間  
②学外実習 8 月 17 日 (月) ～ 8 月 21 日 (金) 5 日間
- ・時 間：①学内実習 9：10～17：15 ②学外実習 各施設指示
- ・内 容：主に施設（障害児・者）の生活支援及び模擬保育（集団レクリエーション）を中心にして実施する。

### (2) 「保育実習Ⅲ」について

学生配布資料を以下のように作成した。

保育実習実施基準より 保育実習Ⅲの目標及び内容

【保育実習】 <科目名> 「保育実習Ⅲ」（実習・2 単位：施設実習）

#### <目標>

1. 児童福祉施設等（保育所以外）の役割や機能について具体的な実践を通して理解を深める。
2. 家庭と地域の生活実態にふれて、子ども家庭福祉、社会的養護、障害児支援に対する理解と共に、保護者支援、家庭支援のための知識、技術、判断力を習得する。
3. 保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結び付けて理解する。
4. 実習における自己の課題を理解する。

#### <内容>

1. 児童福祉施設等（保育所以外）役割と機能
2. 施設における支援の実際

- (1) 受容し、共感する態度
- (2) 個人差や生活環境に伴う子ども(利用者)のニーズの把握と子ども理解
- (3) 個別支援計画の作成と実践
- (4) 子ども(利用者)の家族への支援と対応
- (5) 各施設における多様な専門職との連携・共同
- (6) 地域社会との連携・協同
- 3. 保育士の多様な業務と職業倫理
- 4. 保育士としての自己課題の明確化

#### 学内実習

・保育士養成課程により、定められた目標と内容を達成するために工夫をし、実施する。

- (1) T 県社会福祉協議会 福祉カレッジによる福祉体験講座の受講
- (2) 施設の生活支援のライブ配信、オンデマンドによる視聴と解説
- (3) 実習施設の動画視聴と解説
- (4) 協力施設の協力のもと、事例検討、個別支援計画の作成
- (5) 生活支援の体験
- (6) 部分実習(余暇活動)
- (7) 調べ学習、自己課題の整理

#### Ⅳ 学内実習の立案

##### 1. 施設実習先「保育実習Ⅰ-2」からの本学への要望

今年度の調査からは、本学への要望として初めて生活支援技術についての内容がみられた。従来の実習施設懇談会では、学生のマナーや実習日誌、指導案の記入方法・内容が主な検討事項であった。

##### 2. 施設実習先「保育実習Ⅰ-2」の本学への要望による学内実習の構成に対する分析・考察

今年度はコロナ禍により、幼児教育学科では実習施設懇談会の開催を取り止め、質問紙法で要望を調査した。

##### (1) 期間

令和2年5月11日～5月末まで (実習依頼承諾書と同封で回答を返信)

##### (2) 対象施設

本学の依頼する保育実習Ⅰ-2(施設) 32施設

回答率 32施設中30施設(93.8%)

##### (3) 質問内容

- ① 本学科の保育実習指導に関して、特に指導上留意したことについて

② 保育実習に関する事前指導で、特に必要と考えられる内容について

③ その他、質問や意見

なお、上記①～③は、いずれも自由記述での回答である。

上記②で生活支援についての要望を含む回答を検討材料とした。回答は、30 施設中 6 施設（20％）であった。

実習施設先からの要望（表 1）には、障害児・障害者に対する生活支援技術の内容が含まれている。本学では、主に子どもへの生活関連を教授する講義科目としては「乳児保育Ⅰ」「子どもの食と栄養Ⅰ」「子どもの保健」「特別支援論Ⅰ」「社会福祉」などがある。また、演習科目では「乳児保育Ⅱ」「子どもの健康と安全」「子どもの食と栄養Ⅱ」がある。

寄せられた要望からは、障害者を中心にした個人の尊厳、障害特性の理解に加え、対面でケアするための生活支援に関する内容も見取れた。

また、障害者施設に勤務する保育士による特別講義からは、生活支援技術の必要性を感じたこと。勤務先の希望もあって介護福祉士の資格を取得したことで、尊厳ある日々の生活に寄り添える強みを持った保育士として、その丁寧な関わりから信頼を得ていることを伺った。また、施設では多職種協働で障害者・障害児の生活支援を実践するため、生活支援を学ぶ大切さを強調されていた。前述の実習施設からの要望と併せ、障害者施設での保育士には幅広い役割が求められることがわかる。

表 1 保育実習に関する事前指導で、特に必要と考えられる内容について

施設（種別）	要 望
A（児童養護）	利用者理解。利用者との距離感について。
B（生活介護 児童発達支援）	障害とはどのようなものか（種類、具体的にどのようなものか）
C（障害者 支援施設）	出来事の前後の様子、環境、支援者の対応、障害特性等から課題を見つけ出すことができる。
D（生活介護）	歯磨きや排せつなどの介助が必要。必要性や方法（事前に大まかでよいので）を学んでくると、心構えができて取り組みやすいのではないか。
E（障害者 支援施設）	利用者への守秘義務を徹底し、プライバシーに対する配慮の大切さ。 特に多い疾病への理解、ケア、技術面について基礎的な内容でよいので、事前指導が必要。
F（障害者 支援施設）	利用者の尊厳を大切にしたい関わりや、守秘義務について。

これらは、「保育実習Ⅲ」の実習施設は T 県では障害者施設が多いことによる特徴的な傾向と捉えることができるのではないかと考えられる。実習で学生は介護職員からも指導を受けているが、

生活支援に関して保育士養成の学習内容と介護福祉士養成との相違の理解が徹底されず、相互に戸惑いを感じているのではないかと推察する。学生は生活支援の学習がないと利用者への介助に戸惑い、結果として利用者理解が深まらず、指導案の立案にも支障をきたしかねないと考えられる。

本学の保育実習では実習日誌に実習内容を残すが、全体的な傾向として生活支援（介護）については実際に学生がどの程度の体験等を行っているのかはまとめられていなかった。それは、保育士養成の実習のねらいには生活支援技術の文言が明記されておらず、教育課程においても障害者の生活支援技術の演習が求められていないからである。

そのため、学生のために実習チェックリストなどを作成し、分析・検討して、障害者・障害児施設ともに、どの程度の生活支援技術が事前学習に求められているのかを確認することが今後の課題として挙げられる。

### 3. 学内実習 5 日間のスケジュール立案

#### (1) 学内実習での生活支援の構成

学生は「保育実習Ⅰ-2」（1年次の施設実習）を修了しているが、実習配属先の施設種別も学生によって異なる。いずれにしても、実習先の具体的理解と、実習のねらいから関わりのアセスメントを深めなければならない。なお、「保育実習Ⅲ」を選択した学生は、施設に就職を希望する者が多数を占める傾向がある。

そこで、筆者が介護福祉士養成課程と介護職員初任者研修の生活支援技術を教授した内容から、教えるべき生活支援の基本を施設の要望に合わせて検討した。さらに、本学の介護福祉士養成課程である健康福祉学科の協力を得て、介護実習室及び入浴実習室、介護用品、福祉用具を活用し、学内実習の 5 日間に組み入れた。本学が、学科を超えた横断的学習が可能である環境にある強みを生かすことができ、かつ同じ福祉専門職としての多職種協働への理解に繋がれたことは、学内実習での大きな成果となるものである。

生活支援の体験学習の内容は、限られた時間内で ICF の 6 つの構成因子を参考に構成し、生活支援技術の原理原則と事故防止の理解、そして体験から障害者に寄り添った介助の理解を学習のねらいとした。以下の内容は、学習のねらい及び時間配分的にはかつての訪問介護員養成の生活支援プログラムから抜粋しての構成である。

さらに、「特別支援論」等の授業進度と実習施設の情報から、医療的ケア児の理解が重要視されており、筆者が医療的ケア教員として健康福祉学科で教授していた際の機器や教材で簡略にオリエンテーションを実施した。

以下は ICF による観点である。

#### ①健康因子 （疾患、健康状態の理解ができる）

- ・麻痺を起こす疾患や視力障害の疾患について学習する。

#### ②心身機能・身体構造 （生活のしづらさを理解できる）

- ・麻痺の種類、視力、言語機能などについて学習する。

③活動（ADL：日常生活動作に応じた生活支援（自立支援）について体験し理解できる）

- ・疑似体験（片麻痺）
- ・食事（トロミ剤を使用してお茶をいれ試飲する）
- ・着替え（座位での前開きの上下着脱（脱健着患の理解）をペアで交互に行う）
- ・入浴（寝台特殊浴槽の使用、介助の注意点を入浴実習室で行う）
- ・排泄（排泄介助の DVD 学習、いたわりトイレ体験を行う）
- ・移動/移乗（a. 車いすの介助（屋外コース）スライディングボード等をペアで交互に行う）  
（b. 視覚障害者のガイドヘルプをペアで交互に行う）  
（c. 下肢装具、杖の歩行介助ペアで交互に行う）

④環境因子（利用者を取り巻く環境、福祉用具について体験して理解できる）

- ・T 県社会福祉協議会 介護実習・普及センターの福祉用具体験講座Ⅰの受講

「高齢者疑似体験・車いす体験を通して、高齢者や障害者に対する理解を深める。また、福祉用具を実際に体験し、福祉用具への関心を高めるとともに、福祉用具の活用について学ぶ」ことが本来の講座の目的である。本来は高齢者介護が主たる講座内容であるが、保育実習Ⅲの対象は障害児・者であることを踏まえて、福祉用具コースと車いす体験コースをミックスさせ、次の 4 点を講座の内容として介護実習・普及センターの講座担当者に依頼した。

- ・福祉用具の選び方・扱い方及び体験  
ベッド、杖、入浴用品、食事用品、排泄用品
- ・モデルルーム  
段差解消機、スロープ、リフト
- ・多様な車いす、操作方法と介助方法（交互に体験）
- ・福祉車両の介助方法（送迎車の体験）  
W 株式会社ウエルキャブステーションより、車種 2 種の福祉車両で乗降の体験学習を実施した。

⑤個人因子 介助の声かけや対処に個人を尊重した配慮を取り入れる。個人情報守秘義務を順守する行動をとる。

⑥参加 介助の際には自立支援を意識し、個人の意思を尊重した共感的態度をとる。個別支援計画を理解した関わりを行う。

(2) 学内実習の 5 日間スケジュール

「保育実習Ⅲ」担当教員を中心に学科で検討し、以下（表 2）のとおり 5 日間で実施。

表 2 学内実習 5 日間のスケジュール

日	1 限	2 限	休憩	3 限	4 限
基本 日程	9:00～9:20 ①体調報告 ②出席印 ③日誌提出 ④日程確認		12:20～ 指定 教室	13:10～	～17:15
① 6/22 (月)	①オリエンテーション ファイリング ②施設の 1 日概要	③11:45～昼食 12:30～移動 12:45～〇〇苑へ移動 見学		〇〇苑から移動 14:00～	14:30～ 介護実習普及センター福祉講座
② 6/23 (火)	①指導案の実施に向けた準備	②障害者施設保育士の事前指導		ICF の概要 麻痺 ①障害者の体験 歩行・車いすの移動介助	②視覚障害者のガイドヘルプ ③模擬保育準備
③ 6/24 (水)	③生活支援方法の学習 電動ベッド、車いす移乗、リフト	④座位の着脱 ⑤おむつ交換 ⑥トロミ作成		医 療 的 ケ ア しくみの理解 ① 喀 痰 吸 引 ②経管栄養	福祉車両の介助 支援 16:30～ 福祉実習室 清掃・消毒
④ 6/25 (木)	模擬保育 準備 役割①保育士②職員 ③利用者(児)	模擬保育①②③		模擬保育④⑤	模擬保育⑥
⑤ 6/26 (金)	模擬保育⑦⑧	模擬保育⑨		模擬保育⑩⑪	学内実習を終えてレポート作成

\* 基本事項として、コロナ感染症対策を実施して実習を行った。アルコール消毒、マスク、フェイスシールド、手洗い、清掃等と、学科で作成した個人健康カードの記入を徹底させた。

## V 結果・考察

学内実習の 5 日間は、保育実習Ⅱと並行して実施された。学科教員の配置、教室の手配や感染防止対策に取り組む必要があり、実習担当教員 2 名は特に拘束時間が増加した。学科で

は保育実習Ⅱの学内実習も並行して行われており、教員の配置やスケジュールの調整が課題である。

・生活支援については、健康福祉学科の介護実習室の空き時間に利用するタイトなスケジュールであったが、学生は施設保育士としての就職を目指しており、真剣で質問も活発であり、機敏な行動で臨むなど実習態度は良好であった。毎日の実習日誌には、「保育実習Ⅰ-2」の1年生のときより生活支援技術の原理原則を理解して実施したことで自信を持った記述がみられた。また、特に感染対策を講じながらのペアでの障害者・介助者としての実習から、新型コロナに対する感染対策の重要性が身についたとの記述もあった。

また、施設利用者の送迎の学習を、民間企業に福祉車両の介助を依頼して実施した。実施後に学生 11 名にアンケート調査した結果、「①内容はどの程度理解できましたか」では、5 段階評価で平均 4.5。「②このプログラムはあなたの今後の進路に役立つものでしたか」は、5 段階評価で平均 4.6 と、いずれも高評価であった。自由記述では「介助者、利用者の経験から、利用者が安心して移動できるか考えながら実施できてよかった。」「介助者が不安に感じていると利用者に伝わるのがわかり、適切に介助できるようになりたい。」など、利用者に寄り添うことの大切さが学習できた。また、「支援する側も力がある」と、今までの子どもへの支援では体験することができなかった、成人に対して体力を必要とする支援を実感することで、安全への配慮についても理解が深まっていた。

そして、学生はすべてのプログラムに対して自発的な学習態度であった。

#### ・学内実習の事後レポート

学内実習レポートから、生活支援に関する記述を抜粋・要約した。10 名は生活支援からの学びについて記述し、1 名は具体的な記述は無かった。(表 3)

表 3 学生の学内実習事後レポートから生活支援に関する記述の要約

学生	内容
A	利用者役から、自分のできることを援助されることが不快であった。どのように援助し、環境づくりをすれば、利用者がやりがいをもって活動することができるのか考える必要がある、障害があるからできないと考えるのではなく、自分でできた達成感を味わうことが大切である。
B	福祉用具などには理由があり、事故につながるため、利用者が安心するよう声をかける。個別支援計画に合わせ生活支援ができるように、職員に確認してできるようにしたい。
C	福祉用具、浴槽環境は自立できるよう工夫され、自立に向けた介助が必要である。 福祉車両の安全性の高さと、簡易な操作で利用者・介助について両者の工夫を学んだ。
D	車いすはスピードが速いと酔いそうになる。どのような介助の際も、利用者に声かけを行うことで安心できる。そのため、他の職員とも連携につながる。
E	移動では利用者が不安を感じる場面がとても多い。着脱の脱健着患など注意することを具体的に学



	べた。利用者に細かい事前の声かけをし、安心してもらえるよう実践したい。
F	視覚障害、医療的ケアなど多くを学んだ。利用者に関わる際は、環境や福祉用具の扱いを理解することが大切。
G	障害の種別だけでなく、家族状況、食事面、生活面の活動状況と内面も理解しておくことが大切。
H	利用者の安全を第一に考え、一人ひとりの障害に合わせた配慮や工夫をする必要がある。何が難しく、何がしたいのかを常に考えた職種と連携して、改善・予防などすることが大事である。
I	相手の気持ちと自立について知り、こちらから声かけをしっかりと行いたい。
J	介助の際は、どんな目的がありどのような自立を目指すか個別の特性や能力を理解することが重要。信頼関係が必要でそのため適切な声量で、はっきりと話し、笑顔でコミュニケーションをとり、状態を知った上で介助を行う。
K	生活支援に関する記述なし

レポートからは「保育実習Ⅲ」の目的に対し、「1. 児童福祉施設等（保育所以外）の役割や機能について具体的な実践を通して理解を深める。」「2. 家庭と地域の生活実態にふれて、子ども家庭福祉、社会的養護、障害児支援に対する理解と共に、保護者支援、家庭支援のための知識、技術、判断力を習得する。」「3. 保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結び付けて理解する。」については、各記述のキーワードから学習目標達成の一助になったのではないかと考える。

「4. 実習における自己の課題を理解する。」は、全体のまとめとともにどのように行動するか記述されており、こちらも生活支援の学びが目標達成の一助になったものとする。

#### ・学外実習の事後レポート

学外実習レポートから、生活支援に関する記述を抜粋・要約した。

表 4 学生の学外実習事後レポートから生活支援に関する記述の要約

学生	内容	【施設種別と生活支援の実習状況】
L	生活支援に関する記述なし	【児童発達支援センター：生活支援介助なし】
M	食事介助、水分補給の介助でトロミ剤の種類が多くあることを学んだ。介助方法もスプーンや口の横からストローを挿入するなど個別に様々であることが分かった。 介助者の判断で勧めるのではなく利用者の希望を聞くこと、自立支援と積極性を引き出す介助が大切である。【障害者支援施設：特に 5 日間、同一者の食事介助実施】	
N	朝の体温測定やマスク着用など現在の環境の変化に戸惑う利用者が多いことが分かった。具体的な介助を学び、知識として取り入れたい。【障害者支援施設：特に 5 日間、体温測定マスク着用実施】	
O	着替えや食事介助では、自立に繋がる関わりができた。初めて親密に関わることができ、個々の良さがあることに気がついた。【児童発達支援センター：生活支援の介助実施】	

P	保育士と介護士が食事・排泄・入浴介助を協働して実施している。障害に応じた関わりがあり、身に着けていくことが利用者理解に繋がると学んだ。障害に合わせて相手を理解しようとする、聞き返しや言い直しがあり、コミュニケーション個別の関わり方がある。 【障害者支援施設：生活支援の介助実施】
Q	利用者の介助など利用者が負担に感じることを無いうに事前に職員間で打ち合わせがあり、役割がある。連携が重要で状態把握に努めることを学んだ。【障害者支援施設：生活支援の介助実施】
R	車いす介助が多く、排泄、入浴、食事も個別の介助が必要であった。利用者の意思を尊重することが大切と学んだ。【障害者支援施設：生活支援の介助実施】
S	車いすの種類も多く、仕組みを理解して使用することが重要。食事は形態が様々で介助方法もことなる。介助には普段の様子を各職種の視点で観察し、多職種との情報交換、連携が重要であると学んだ。【障害者支援施設：生活支援の介助実施】
T	歯磨きの介助を3日間実施したが、毎回様子が違い戸惑った。体調、人間関係、環境で適切な介助は異なっていると学んだ。職員間の情報交換、支援方法を変更できる知識・技術が必要である。 【障害者支援施設：特に3日間、同一者の歯磨き介助実施】
U	入浴の準備から入浴後まで一連の介助を実施した。コミュニケーションをとり、利用者の障害特性、能力、性格を理解することが大切と学んだ。日常生活からの観察や考察が重要だと学んだ。
P	職員は生活支援では体調や要望を丁寧にコミュニケーションしていた。障害者には生活支援技術とともに、コミュニケーション能力が重要であると学んだ。【障害者支援施設：生活支援の介助実施】

学外実習の事後レポートからは、児童発達支援センターに配属され、生活支援介助がなかった1名を除く10名に、生活支援に関する記述がみられた。

実習日誌からは、特に障害者支援施設の配属学生は、生活リズムに合わせて幅広い内容で生活支援介助を行っていた。施設によって、食事介助は実習期間をとおして一人の利用者だけを受け持ちしたり、入浴では準備から入浴後まで一連の介助を実施したり、多様である。

レポートには、「体調、人間関係、環境で適切な介助は異なっていると学んだ。」「利用者の意思を尊重することが大切と学んだ。」「日常生活からの観察や考察が重要だと学んだ。」などの記述がみられた。学内実習の生活支援技術の原理・原則の学びと個々の体験を経ており、利用者個々の背景を理解することについて、学外実習こそ短縮されたが学習は発展していると推察される。

「介助には普段の様子を各職種の視点で観察し、多職種との情報交換、連携が重要であると学んだ。」や、「職員間の情報交換、支援方法を変更できる知識・技術が必要である。」など、生活支援の場面で保育士以外からの直接的指導やカンファレンス参加・見学などから多職種協働についても学び、その重要性も理解されていた。

また、キーワードとして「コミュニケーション」が3名にみられ、障害特性はもちろんではあるが、成人とのコミュニケーション技術の未熟さを感じている。今後の事前指導におけ

る新たな課題として捉えることができると考える。

生活支援の視点から学内・学外実習では、「保育実習Ⅲ」の内容である「2. 施設における支援の実際」(1) 受容し、共感する態度、(2) 個人差や生活環境に伴う子ども(利用者)のニーズの把握と子ども理解、(5) 各施設における多様な専門職との連携・共同と、4. 保育士としての自己課題の明確化について網羅されたと思われる。

## VI まとめ

学内実習のうち生活支援の実習内容の成果と今後の課題を明らかにすることを目的としたこの研究において、以下のことが明らかとなった。

- (1) 実習の受け入れ先では、障害児・障害者に対する生活支援技術について保育実習生が学んでくることを望む傾向がある。
- (2) 介護実習室及び入浴実習室、介護用品、福祉用具を活用し、学内実習に組み入れたことが、生活支援の体験学習として有意義な機会になることが示唆された。
- (3) 保育士が介護分野の生活支援を学ぶことで、同じ福祉専門職としての多職種協働への理解に繋げられること。

## 感想と研究の限界

今回のコロナ禍での実習体制の見直しから、初めての学内・学外実習による2部構成となった。施設保育士を目指す学生に対して、「保育実習Ⅲ」として保育士養成課程において障害者の生活支援技術の教育内容について知見を得る機会にすることができた。今後も研究を継続して、保育士養成に貢献できるように努めたい。

なお、今回の研究では調査対象と得られたデータがもとより多くなかったことから、学内実習の日誌及び学内実習レポートの活用方法や事前学習のあり方を十分深めるまでには至らなかった点が課題と考えている。

## 参考文献

- 1) 一般社団法人全国保育士養成協議会(2018)「保育実習指導のミニマムスタンダード Ver. 2」中央法規出版
- 2) 西村 実穂・徳田 克己(2017)「医療的配慮に必要な子どもの保育」中央法規出版
- 3) 平尾 太亮・土谷 由美子(2016)「保育養成課程における施設実習に関する一研究」『中国学園紀要 第15号』pp. 5-10
- 4) 吉田屋 幸子(2020)「保育士養成課程における施設実習前の学生の意識」『東京未来大学紀要 Vol. 14』pp. 209-212